

語用論と意味論の違い

岡田聡宏

1. はじめに

形式意味論、特に真理条件的意味論では、文の意味はその文の真理条件にほかならないととらえ、文にはコンテキストから独立した不変の意味があると考えてきた。他方で、形式意味論の立場とは対極にあり、コンテキスト主義者とも呼ばれる、カーストン (Robyn Carston) やレカナティ (François Recanati) 等は、自然言語を扱う際にはコンテキストが必ず関与し、文の意味を文の真理条件と同義ととらえる考え方に真っ向から異を唱えている。本稿では、カーストン (Carston 2007) とレカナティ (Recanati 2006a, 2006b) の主張に沿って、「語用論と意味論の違い」を整理し、この問題について考察を加えたいと思う。

2. 文の意味と真理条件

カルナップは語用論、意味論、統語論 (構文論) のそれぞれについて、以下のような区別をしている。

研究の中で、話し手あるいは、もっと一般的にい方をすれば、言語の使用者に対する明白な言及がなされるなら、その研究を語用論 (pragmatics) の分野にわりあてることにする。(この場合指示対象への言及がなされるか否かはこの分類にとってどうでもよいことである。) 言語の使用者を捨象し、表現とその指示対象のみを分析するならば、われわれは意味論 (semantics) の分野にたずさわっている。そして、最後に、指示対象を捨象し、ただ表現と表現の間の関係のみを分析するなら、われわれは (論理的) 構文論 (syntax) にたずさわって

いる。(Carnap (1942) (遠藤 弘訳『意味論序説』 p. 19))

つまり、言語使用者である話し手が関与するのが語用論、純粹に言語表現と指示物を扱うのが意味論、言語表現間の関係にのみ注目するのが統語論であるとカルナップはそれぞれを区別しているのである。しかし、ともにことばの意味を扱う意味論と語用論の区別はそれほど単純なものではない。特に話し手及び言語使用という面を捨象して、表現と指示対象の関係を分析することが本当に可能であろうかという疑問が残る。この疑問はそのまま形式意味論の考え方にも当てはまると言える。

形式意味論、殊に真理条件的意味論では、文の意味はその文の真理条件であり、文はコンテキストに依存しない不変の意味を表わすという考え方が中心的となっている。これに対して、自然言語の解釈はコンテキスト及び伝達者の意図と密接に関係していると考えられる語用論の分野では、文の意味と話し手の意味(発話の意味)を区別し、文の意味は話し手が伝えようとする意味とは異なるものであるととらえている。

文の意味と真理条件の問題を検討する前に、まずは文の意味と話し手の意味の違いについて確認したい。

(1) a. Peter: Would you like something to eat?

b. Mary: I've just had lunch.

メアリーの返答(1b)は、ピーターの問いに直接答えてはいないが「お昼を食べたばかりだ」という理由をつけて、別のレベルの意味である「結構です(何も食べたくない)」を含意として伝えている。またもし(1b)に下降上昇調が使われたら、「(食事を済ませたばかりだけれど)まだ少し物足りない」などの意味が含意されることになる。これらの意味は(1b)の文の意味に頼るだけでは得られない、コンテキストによって決定される話し手の意味である。話し手の意味を考える際には、このようにコンテキスト・話し手・言語使用という面が重要となってくる。話し手の意味とは対照的に、文の意味については、話し手

の関与を排除して、純粹に文が表わす明示の意味だけに限定することができるかもしれない。以上のように考えると、意味論と語用論の区別は、文の意味と話し手の意味、とくに文の明示的な意味 (what is said) と文の非明示的な意味 (関連性理論の用語では暗喩 (implicature)) との区別に一致するとも考えられる。しかし、両者の違いをこのように単純化する前に、もっと根本的な問題を整理する必要がある。その根本的な問題とは、文の意味と命題の問題である。

そもそも文の意味はすなわち命題なのであろうか。それとも命題とは異なるものなのであろうか。一般的に意味論では、文の意味は文の命題を表わすと考えられている。しかし語用論では、文の意味は言語的に符号化された意味に過ぎず、不完全なものであるという認識で一致していると思われる。つまり、語用論の研究者の見解では、語用論的解釈プロセスを介さずには、文の意味から真偽値の問える最低限の命題を復元することすらできないということになる。真偽値の問える命題とするためには、指示付与 (reference assignment)、多義的な語の一義化 (disambiguation)、飽和 (saturation)、アドホック概念 (ad hoc concept) 構築などの「発展」と呼ばれる肉付け作業が必要となる。これらの作業はすべて、話し手の意図、コンテキスト、そして語用論的原理などが関与する語用論上の解釈プロセスによって行われるものである。カーストンが挙げる次の例からも明らかなように、コミュニケーションでは、どんなに文の意味に肉付けをしても直接は得られない非明示的な暗意と明示的な内容である明意 (explicature) の両方が伝達される (詳しくは Carston (2007) を参照のこと)。暗意も明意も文の意味とは異なるもので、語用論的プロセスによって導き出されたものである。真偽値の問える最低限の表出命題を復元するにも、明意を解釈する語用論的プロセスが必須となる。この例をみるだけでも、文の意味には不確定な要素が多く、文の意味 = 真理条件と考えることが不可能なことが明白となる。

- (2) a. How is Jane feeling after her first year at university?
 b. She didn't get enough units and can't continue.

(2b) の文の意味だけをみても、*she* が誰か、*units* は何を指すのか、*enough* は何に十分なかが分からない。さらには *She didn't get enough units* の部分と、*can't continue* の部分との因果関係についても *and* 自体の意味からは特定することはできない。真理条件を決定するには、コンテキストに基づいて (3a) のような命題形式、つまり話し手の意味となるまで文の意味を発展させなくてはならない。

- (3) a. [JANE₁ DIDN'T PASS ENOUGH UNIVERSITY COURSE UNITS TO QUALIFY FOR ADMISSION TO SECOND YEAR STUDY]_P & AS A RESULT OF P JANE₁ CANNOT CONTINUE WITH UNIVERSITY STUDY]
b. JANE IS NOT FEELING HAPPY.

(3a) は文の意味ではなく、コンテキストを含む言語使用の面を無視しては得られない話し手の意味である。真理条件的意味論が主張するように、真理条件が意味ならば、話し手の意味を考慮に入れないと真理条件を規定することができないため、文の意味だけでは意味を持たないことになってしまう可能性もでてくる。また、伝達される話し手の意味には (3a) に加えて、(3b) のような非明示的な内容も伝達される。このような暗意については、コンテキストが関与するという事は議論の余地のないことであろう。文の意味と命題の関係について、さらに次の例をみてみたい。

- (4) ぼくの餌が足りないんだ。

コンテキストから独立して解釈した場合、(4) は命題を持たないことになる。まず、「ぼく」の指示対象が決定されていないし、「ぼくのえさ」の意味も明らかにされていない。つまり、「ぼくの持っている餌」なのか、「ぼくが買った餌」なのか、あるいは餌の意味を人に対して用いることができるまで拡張（語彙的拡張）した「ぼくが食べる餌」なのか、分からない。さらに「足りない」につ

いても、何に対して足りないのかが明らかにされていない。これらの要素を決定するためには、指示対象付与や飽和などの語用論的解釈プロセスが必要である。これらの要素が明らかにされない限り真偽値の問える命題を復元することはできない。たとえば、現在話し手である「よしお」が釣りをしており、魚の餌が釣りを続けるには足りないというコンテキストを想定してみる。このような状況では、「よしおが釣りに使う餌の量が釣りを継続するには足りない」ということが解釈される。また「楽しくないの」という問いに対する答えであれば、以上の明意から「（よしおは釣りを続けることができないので）楽しくない」という暗意が解釈される可能性もある。

以上のように、発話の明示的意味が得られない限り、文の真理条件は決定することはできない。明意の解釈プロセスには、必然的に話し手の意図やコンテキストといった語用論的要素がからんでくるのである。つまり、語用論的プロセスを排除して真理条件を問題にすることはできないということになる。意味論の分野でも、命題の決定に語用論的プロセスが関与する点を認める研究者もいる。しかし、基本的には語用論の関与する面と語用論とは独立した純粋に意味論によって決定される面を分け、コンテキストに依存しない不変の意味を表わすという形式的意味論の立場を保持している。つまり、語用論が関与するのはごく一部の指示表現のみとし、そのような指示表現が含まれていなければ、文の意味がコンテキストにかかわらず不変の命題を表わすと考えているのである。次の節では、意味論のこのような見解とその問題点について確認したいと思う。

3. 文の意味と命題

3.1. 指示語

バック（Kent Back）は、話し手の意図にかかわらず、文は不変の意味を表わすという立場をとっている。しかし、カーストン（Carston 2007）が指摘するように、バックは言語的に符号化された文の意味に加え、*I, today, here* などの *pure indexicals* と呼ばれる指示語も、意味論によって決定される不変の意味として扱っている。バックは、コンテキストを一部の指示語の指示対象を自動的

に決定する *narrow context* (狭義のコンテキスト) と語用論に関わる *broad context* (広義のコンテキスト) との2つに分け、前者の機能を意味論に含んでいる。

There are two sorts of contextual information, one much more restricted in scope and limited in role than the other. Information that plays the limited role of combining with linguistic information to determine content (in the sense of fixing it) is restricted to a short list of variables, such as the identity of the speaker and the hearer and the time and place of an utterance. Contextual information in the broad sense is anything that the hearer is to take into account to determine (in the sense of ascertain) the speaker's communicative intention. It is often said that what a speaker means "depends on context," is "determined by context" or is "a matter of context," but this is not narrow context in the semantically relevant sense discussed above. (Bach 1997: 39)

たとえば、*I* は話し手を示し、*now* は発話時を示すというように、狭義のコンテキストによって、話し手の意図とは切り離して自動的に指示内容が決定されることになる。*I, today, here* などの *pure indexicals* に対して、*he* とか *she* などの3人称代名詞や *that* や *those* などの指示語については、広義の語用論的コンテキストによって決定されると述べている。

ここで、*I, today, here* など指示語の内容が広義のコンテキストによってではなく、狭義のコンテキストによって自動的に決定されるのかという疑問が生じる。たとえば、2009年4月10日の午後2時に「昨日のお昼に会ったとき、なおこさん何て言ってた」と、よしおが第3者に尋ねられ、次のような返答をしたと仮定する。

(5) 私、忙しくて今話している時間がないの。

この場合、「私」は自動的に現在の発話者である「よしお」に、「今」は現在の

発話時である (2009 年 4 月 10 日午後 2 時) に、それぞれ自動的に決定されるとすると、この文の意味は偽となってしまう。「私」は「なおこ」であるし、「今」は「2009 年 4 月 9 日の昼 (12:00)」とバックの用語を使えば 'broad context' に基づいて語用論的に解釈されなければならない。つまり、真偽値の間える命題とするには「私」や「今」といった語でさえ、語用論的解釈プロセスを必要とするのである。また以下のようにカーストンが問題点を指摘しているように、*here* の指示内容に関しても狭義のコンテキストに頼るだけでは決定することはできない。

First, there is the question of how far, on any given occasion of use, the bounds of the reference of 'here' and 'now' extend. The possible referents of a token of 'here' include the very section of space occupied by the speaker's body at the time of utterance (rather unlikely to be the intended referent) through increasingly more inclusive areas (the room in which the utterance occurs, the building, institution, town, country, etc.), up to (and perhaps beyond) our universe as opposed to other universes; the same holds, *mutatis mutandis*, for 'now'. (Carston 2007: 11)

確かに *here* は、話し手が発話時にいる最も限定された場所から、たとえば部屋の中、建物の中、地域の中、国の中、この世界全体、といったように際限なく「ここ」という場所を指す可能性がある。レカナティも *here* や *now* などの *pure indexicals* について、広義のコンテキストに頼らずに、狭義のコンテキストだけで指示内容を決定することはできないと主張している。

We encounter the same problem even with expressions like *here* and *now*, which Kaplan classifies as **pure** indexicals (as opposed to demonstratives). Their semantic value is said to be the time or place of the context respectively. But what counts as the time and place of the context? How inclusive must the time or place in question be? It depends on what the speaker means, hence,

again, on the wide context. We can maintain that the character of *here* and *now* is the rule that the expression refers to “the” time or “the” place of the context – a rule that automatically determines a content, given a (narrow) context in which the time and place parameters are given specific values; but then we have to let a pragmatic process take place to fix the values in question, that is, to determine *which* narrow context, among indefinitely many candidates compatible with the facts of the utterance, serves as argument to the character function. On the resulting view, the (narrow) context with respect to which an utterance is interpreted is not **given**, not determined automatically by objective facts like where and when the utterance takes place, but it is determined by the speaker’s intention and the wide context. Again we reach the conclusion that, formal tricks notwithstanding, pragmatic interpretation has a role to play in determining the content of the utterance. (Recanati 2006b: 453-454)

レカナティの引用からも明らかなように、*here* や *now* などの *pure indexicals* でさえも、複数ある指示内容の候補の中から1つに限定する作業には、狭義のコンテキストではなく、広義のコンテキストが必要となる。コンテキストを狭義のものと広義のものとの2つに区別することによって語用論を排除し、純粹に意味論が扱う意味を抽出しようとしているが、結局その試みも成功しているとは言い難い。指示語の指示内容についても、語用論の解釈プロセスを介さずには、決定することができないのである。

3.2. 文の意味と不確定性

前節でみたように、バックも命題の復元には語用論的プロセスが関与していることを認めはしているものの、意味論が決定する最低限の意味があるとの見解を示している。本節で検証するカプランとレポア (Cappelen and Lepore) も語用論の関与を認めつつも、以下に示す通り、わずかの指示語のみが語用論的プロセスを要求し、それらの語を含まない文は語用論から独立して、その文の

命題を表わすとしている。

The most salient feature of Semantic Minimalism is that it recognizes few context sensitive expressions, and hence, acknowledges a very limited effect of the context of utterance on the semantic content of an utterance. The only context sensitive expressions are the completely obvious ones ('I', 'here', 'now', 'that', etc., (essentially those Kaplan lists in 'Demonstratives', (1989, p. 489). These are not only obvious, they also pass certain tests for context sensitivity we spell out below.

(Cappelen and Lepore 2005b: 1)

カプランとレポアの主張は、バックの考え方と類似した面もあるが、基本的には文の意味はその真理条件であるとする伝統的形式意味論の考え方に近似している。次の例は、バック (1997) が明示的な文の意味と非明示的な話し手の意味との中間に位置するととらえているもので、グライスの *implicature* と區別して、*implicature* と呼んでいるものである。

- (6) a. He is ready.
b. She is too tall.
c. I've had enough.
d. Mary's book.

これらの例はすべて、符号化された意味だけでは不十分で、(6a-c) については「何の準備ができていないか、何に対して背が高いのか、何に十分なのか」を明らかにしなくてはならないし、(6d) については「メアリーが買った本、メアリーが所有している本、メアリーが読んだ本、メアリーが書いた本」などメアリーと本の関係について明らかにする必要がある。このような意味内容の決定には、バックも認めているように、語用論のプロセスが関係する。しかしカプランとレポアは、(6a-c) のような例についてもコンテキストの影響は受けないと

し、飽和などの語用論的プロセスを通さずに、完全な命題を表わすことができると主張している。

But look at our tests: we take it as obvious that anyone reporting A's utterance can accurately utter 'A said that Rudolf is tall' and this is so regardless of the context the reporter happens to find herself in, i.e., even if the context of the report and the context of the reported utterance are relevantly different, i.e., even if giraffes are not particularly salient in the context of the report. The reporter might not know that Rudolf is a giraffe; she might be unsure what kind of animal Rudolf is; or suspect he is a reindeer. The point is this: If the context of the first utterance and the context of the second utterance are relevantly dissimilar, then this report ought to be impossible – if 'tall' really is context sensitive. (Cappelen and Lepore 2005b: 7)

カプランとレポアによると、もしある表現が本質的にコンテキストの影響を受けない (context insensitive) 表現である場合、どのようなコンテキストでも間接話法を用いて (たとえば *Nina said that John is ready* のように) 文の内容を真として伝えることができると考えている。また、*I* や *here* などのように、表現がコンテキストの影響を受ける (context sensitive) 場合には、その表現が障害となり、真として伝えることができなくなるというものである。カプランとレポアは、表現がコンテキストの影響を受けるかどうかの判断をするには、間接話法を用いてコンテキスト横断的に真として文の意味的内容を伝えられるかどうかをテストすればいいと考えている。上のように *tall* については、飽和のプロセスを経由せずに真となる意味内容、つまり命題を表わすことができると主張している。また、エベレスト、エンパイヤステートビルや背の高い人物は、すべて共通して *tall* という特徴を持っており、*tall* は比較対象を用いずにそれ自体で命題に貢献できると考えているようである。また、*tall* が *tall* たる所以については形而上学の問題であるとし、語用論で必須と考えるプロセスは意味論の関与すべきことではないと、コンテキスト主義者達の見解を退けている。

これに対して、*ready* などの類似表現について、レカナティは比較対象を語用論的に決定せずに完全な命題を表わすとするカプランとレポアの主張に強い疑問を示し、コンテクストの重要性を指摘している。

Thus they hold that, if we put tense aside, sentences like ‘John is ready’ or ‘steel is strong enough’, which most theorists consider context-sensitive, actually express complete propositions independent of context. To be sure, such sentences invite the question: ‘for what?’ (‘ready for what?’ ‘strong enough for what?’), and it is the context that enables us to answer such questions; but Cappelen and Lepore hold that the sentences nevertheless express complete propositions independent of context. Which propositions? They don’t tell us. They say it’s an issue for the metaphysician, not the semanticist. The semanticist ought to be content with biconditionals such as: ‘*Steel is strong enough*’ is true if and only if *steel is strong enough*, and ‘*John is ready*’ is true if and only if *John is ready*. (Recanati 2006a: 21-22)

レカナティが述べるように、「何に対して～」という要素を明らかにしなくては、真偽値の問える命題を表わすことにはならない。たとえば二人三脚の相手を選ぶ場面を仮定してみる。まず身長 105 センチの小学生 B の相手として身長 168 センチの教員 A が候補に挙がったとする。この状況で「A さんは背が高すぎる」と言えば「B の二人三脚の相手としては、A は背が高すぎる」という意味に解釈できる。次に身長 190 センチの C の相手として A が候補に挙がったとする。この状況では同じ A について「A さんは背が低すぎる」と言うことは可能である。解釈としては、「C の二人三脚の相手としては、A さんは背が低すぎる」という意味となるであろう。A が日本人の男性であれば平均値に近い身長であるため、コンテクストがなければ、中背としか表現できないかもしれないが、コンテクストによって「高い」「低い」という概念は変化する。少なくともこの一例から言えることは、真偽値の判断ができる命題とするためには、コンテクストを通して飽和によって「何に対して」高いのか、あるいは低いのかとい

た要素を明らかにする必要がある。

上述の飽和の問題に加えて、*disambiguation*（多義的な語に関する意味決定）の問題もカプランとレポアの分析には含まれる。たとえば間接話法を用いて *Nina said that John went to the bank* と伝えることは可能であるが、真偽値を問うには、「銀行」か「土手」かのいずれかに意味を決定しなくてはならない。カーストン（Carston 2007: 23）による次の例をみることにする。この例は、ロンドン郊外のクロイドンで起こった事件の際に実際に発話されたものである。多義性の問題について論じる前に簡単に状況を説明する。1952年、19歳のデレック・ベントリーは窃盗を計画し、警察に追われ、銃を持った仲間のクリストファー・クレイグに（7a）のように叫んだと言われている。

- (7) (a) Derek Bentley: 'Let him have it, Chris.'
(b) DB told Chris to let the policeman have the gun.
(c) DB told Chris to shoot the policeman.
(d) DB told Chris to let him have it.

カプランとレポアによれば、どのようなコンテキストでも同じ文を発話すれば、すべて同じ意味内容、即ち同一の命題を表すことになる。もう少し詳しく述べれば、間接話法の形式を用いることによって、すべての発話がコンテキストにかかわらず同じ意味内容（命題）を表すことができるようになるということである。しかし、指示語の問題と同様に、多義的な語を含む場合、複数ある意味の中から意図されている意味を明らかにしない限り、命題を得ることはできないという問題が生じる。さらにもう1つの大きな問題は、指示語の指示対象も語用論的に決定されるように、多義的な語の意味も語用論のプロセスによって決定されるという点である。

As with the fixing of values of indexicals in the process of utterance comprehension, *disambiguation* (or *sense selection*) is dependent on considerations of the speaker's communicative intentions, hence on wide context, so

presents yet another respect in which C&L's semantic contents ... are in fact not stable across contexts.

(Carston 2007: 22-23)

カプランとレポアに従うと、文はコンテキストに左右されない不変の意味を表わすということになる。つまり、コンテキストによって解釈が揺れるというようなことは起こらないはずである。ところが (7b) と (7c) が示すように、*Let him have it* という表現には、「その警官に銃を渡せ」と「その警官を撃て」の2つの解釈が可能である。事実、被告弁護人が「その警官に銃を渡せ」だと主張したのに対し、法廷は「その警官を撃て」の意味だと解釈し、ベントリーは結果として絞首刑に処せられたのである。ベントリーがいずれの意味でこの発話を行ったかは現在でも議論の分かれるところであり、真相は完全には明らかにされていない。ベントリーが意図した意味は1つであるが、この文には2つの解釈が可能なのは以上のことから分かる。つまり、この文は多義的であるため、符号化された文の意味にコンテキストに左右されない唯一の意味があるわけではなく、(現実にはコンテキスト的情報が限られているが) 話し手の意図やコンテキストに基づいて語用論的に意味を決定しない限り1つの解釈にたどり着くことはない。したがって、符号化された文の意味だけでは、多義的な意味を1つに決定できない以上、真か偽かを判断することはできない。以上のように、カプランとレポアの主張に反して、符号化された意味だけでは、完全な命題を表わすことができないのである。真偽値の問える最低限の命題を復元するためにも、指示付与、多義的な語の意味決定、飽和などの語用論的プロセスが必要なのである。

もし意味論によって真理条件が決定されないのならば、少なくとも自然言語に関する限り意味論の役割はかなり限定されてくる。カーstonは、意味論が関与するのは言語的に符号化された意味 (Linguistically Encoded Meaning (LEM)) のみであり、命題の復元を含めてそれ以外の解釈は語用論が担うものであると結論を下している。言語的に符号化された意味は、コンテキストに左右されない不変の意味であり、この意味を基礎として、指示付与、多義的な語

の意味決定、飽和などのプロセスを経て明示的意味、さらには非明示的意味が構築されることになる。カプランとレポアの分析法の問題点は純粋に意味論によって命題が決定されると考えているところにある。カーストンの述べるように、意味論だけが担う役割はかなり限定されており、自律的に命題を決定することはできないのである。

4. まとめ

文の表わす意味はその文の真理条件にほかならないという真理条件的意味論の考えは、現在においても意味論の分野に影響を与えている。しかし文には、指示語、多義語が含まれており、これらの語に対して指示付与、意味決定のプロセスがそれぞれ必要になる。さらに、指示語や多義語以外にも文には不確定な要素がふくまれており、飽和などのプロセスにより文の明示的内容 (expliciture) を復元しなくてはならない。符号化された意味の復号化以外はすべて語用論のプロセスが関与することになる。つまり意味論と語用論の区別は、(明示的な意味と非明示的な意味の両方を含む) 話し手の意味と符号化された意味との区別に一致することになる。

カーストンは、語用論から独立して意味論のみで真理条件を決定する領域があるという指摘もしている。その領域とは人の思考の領域である。発話理解と異なり、自分自身の思考を発展させて命題を決定する必要はない。つまり、思考を構成する心的表示はそれ自体で意味的に完全なもので、真偽値の問える命題となっていると言っている。このように考えると思考の領域では、意味論が真理条件に関与し、語用論が関与するのは発話解釈のみということになる。逆に言えば、発話解釈に関しては、真理条件を決定する意味論の役割が大きく変わることになる。

Thus the original notion of semantics (as applied to thought, and perhaps certain artificial languages), concerning a relation between representations and states of affairs, is inevitably altered when it is applied to natural languages. Semantics understood as linguistically encoded meaning (LEM, or semantic

character, or formal signification) cannot but part company from semantics understood as devoted to truth-conditional content. (Carston 2007: 39)

カーストンの考え方によれば、思考の領域ではなくて自然言語の領域では、意味論は役割を失うことになる。カーストンはチョムスキー (1995, 1996) を引用して次のように述べている。

Chomsky (1995, 1996) has suggested that there is little basis for a reference-based semantics of linguistic expressions and that natural language probably has only syntax and pragmatics. On this view, LEM is simply the ultimate representational output of the language faculty or grammar, a structured string of symbols, which plays an important part in a theory of understanding. (Carston 2007: 41)

つまり自然言語に関しては、究極的に残るのは統語論と語用論の区別のみとなるということである。

自然言語に関するカーストンの考え方は正しいと思われるが、意味論不成立論についてはさらに考察が必要であろう。この点に関して、レカナティは、意味論が自律的な役割をするという考え方を放棄すれば、真理条件を決定するという意味論の役割と語用論の役割は両立すると述べている。

We can maintain both that semantics determines truth conditions and that, in order to do so, it needs input from pragmatics. (Recanati 2006b: 457)

意味論不成立論を受け入れる前に、語用論によって決定された要素に基づいて意味論が真理条件を決定するとするレカナティの指摘についても詳しく検討する必要がある。意味論と語用論の区別を符号化された意味と話し手の意味の区別と考えるか、あるいは意味論を除き、自然言語において実際に存在するのは統語論と語用論の区別だけだとするかについては、まだ議論の余地があるが、

意味論が独立して真理条件を決定することができないということは確かなことであり、話し手とコンテキストが関係する以上、明示的意味の復元には必然的に語用論が関与すると言える。

(附記) 本稿は、平成 21 年度安倍能成記念教育基金学術研究助成金による研究成果の一部である。

参考文献

- Bach, Kent. 1997. The semantics/pragmatics distinction: What it is and why it matters. In *Linguistische Berichte*, Sonderheft 8, 33-50. Available at: <http://userwww.sfsu.edu/~kbach/spd.htm>
- Cappelen, Herman. & Lepore, Ernie. 2005a. *Insensitive semantics. A defense of semantic minimalism and speech act pluralism*. Oxford: Blackwell.
- Cappelen, Herman. & Lepore, Ernie. 2005b. A tall tale: In defense of semantic minimalism and speech act pluralism. In G. Preyer & G. Peter (Eds.), *Contextualism in philosophy*. 197-219. Oxford: Clarendon Press. Available at: <http://folk.uio.no/hermanc/docs/TallTale.pdf>
- Cappelen, Herman. & Lepore, Ernie. 2006. Response. In *Mind & Language*, 21 (1): 50-73.
- Carnap, Rudolf. 1942. *Introduction to semantics*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (遠藤弘訳 1975. 『意味論序説』紀伊國屋書店)
- Carston, Robyn. 2007. Linguistic communication and the semantics/pragmatics distinction. In *Synthese* 165, 3: 321-345. Available at: <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/robyn/Carston-Linguistic%20Communication-2007.pdf>
- Kaplan, David. 1977/1989. Demonstratives. In J. Almog, J. Perry, & H. Wettstein (Eds.), 1989. *Themes from Kaplan*. 565-614. Oxford: Oxford University Press.

Recanati, François. 2006a. Crazy minimalism. In *Mind & Language*, 21 (1): 21-30.

Recanati, François. 2006b. Pragmatics and semantics. In L. Horn and G. Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*. 442-462. Oxford: Blackwell.

今井邦彦 (編) 2009. 『言語学の領域 (Ⅱ)』 朝倉書店

田窪行則・西山佑司・三藤博・亀山恵・片桐恭弘 1999. 『岩波講座 言語の科学 7 談話と文脈』 岩波書店

Pragmatics/Semantics Distinction

Toshihiro Okada

Central to the formal semantics tradition, especially to the tradition of truth conditional semantics, has been the equation of the meaning of a sentence with its truth condition (the condition under which a given proposition is true). Some semanticists believe that the sentence meaning is identical to the proposition of the sentence, and the proposition is determined exclusively by semantics without relying on pragmatics, except in very limited cases. Pragmaticists or contextualists, on the other hand, claim that the recovery of the proposition inevitably involves pragmatic processes, and it cannot be determined without considering the context. The sentence meaning itself is incomplete in many ways, because it contains underdetermined elements including indexicals and demonstratives as well as ambiguous words or phrases. It needs to be developed by such pragmatic processes as reference assignment, disambiguation, and saturation in order to be a full-fledged proposition.

In her ultra-minimalist view, Carston (2007) claims that semantics is concerned only with LEM (Linguistically Encoded Meaning), which is the only context-free meaning, and that the semantics/pragmatics distinction for at least natural languages holds between LEM and speaker meaning. She also claims that LEM is the ultimate representational output of grammar, and that the only distinction that works may be a syntax/pragmatics distinction. More careful examination may be needed before we accept her claim, but it is true that semantics has no autonomous role in determining the truth condition of a sentence, and the recovery of the proposition always involves pragmatic processes.